
殺してやる

プロク

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

殺してやる

【Nコード】

N5086B

【作者名】

プロク

【あらすじ】

コロシテヤルと声が聞え始める、その声は殺意を持って強く強くなっていく。学校はパニックになる。

殺してやる

コロシテヤル

昴は飛び起きた、ぬめるような冷や汗をかいていた。目覚ましが鳴る前に起きてしまった様だ。

「くそ、嫌な夢を見た」

吐き捨てるように呟いた。

恐ろしい夢だった。しかし、夢の内容が思い出せない。全身に張り付く汗。夢が事実である事を物語っていた。考えても仕方が無いので着替えを始める。

昴は、ねっとり張り付く下着を脱いで、タオルケットで汗を拭く。腕に鳥肌が立っていた。8月なのに、寒い。

学生服を着る頃には寒さも無く、夢の事も気にならなくなっていた。

「おはよ、お母さん、今日は何？」

まあ、と驚いた表情で母が振り返る。

「今日は早いね。揺すつても起きないくせに」

「俺も成長したんだよ」

飽きれ顔の母は続ける。

「毎日、そうならいいのにね」

テーブルを見ながら話す。

「朝ご飯何？」

「目玉焼きにお味噌汁」

シンプルな朝食にがっくりくる昴である。

「のりも付けて」

「戸棚から出して」

朝のワイドショウを見ながら朝食を食べていた。時計を見ると、もう出かける時間だった。昴は鞆を拾い上げ、家を出てバス停へと急いだ。すっかり夢の事は忘れていた。バス停には幼馴染の美咲が

いた。

「おはよう」

美咲はびっくりした顔で振り向く。

「おはよう」

心なしか顔色が悪そうな感じ、気になったので声を掛けた。

「あれ、元気がなさそう？」

「うん、そんな事無いよ」

「そか」

やがて二人は、やって来たバスに乗り込んだ。混んでいたのも二人ともつり革につかまった。

しばらくすると。

コロシテヤル

ドキツとする昴。とんでもない声が頭の中で囁いた。誰が言ったのか分からない。気のせいかと思たが、気になって周りを見た、誰かと目が合つて思わず離す。そして、隣りの美咲を見た。

美咲は一瞬、困ったような、何か訴えたいような表情でこちらを見たが、すぐに目を伏せてしまった。顔色がさっきより悪そうだった。声を掛けることも出来ず、昴も目を伏せた。

重苦しい沈黙が車内に漂っていた。

バスは何事もないように、西が丘高校前に着き、校門に向かって歩き始める。波打ち際のざわめきの如く、騒がしい登校の風景が。今は小波のように囁きながら登校していた。二人も同じように静かに校門に向かっていった。

コロシテヤル

息を呑んで立ち止まる二人。間違いなく聞いた。昴は慌てて周りを見渡す。誰が言ったのか確かめようとした。見渡す限り、皆も立ち止まって周りを見ていた。

声の主がわからないため、苛立だっていた。

「くそ、殺してやるって何だ」

思わず、声に出してしまった昴。

美咲がびくつとして昴を見ながら後づさる。

はっと、我に帰った昴は美咲を見た。脅えた表情で昴を見ている。

「ちがう、俺じゃない」

美咲は震えた声で聞く。

「誰が言ったの？」

昴は首を振りながら答えた。

「わからない」

周りを見渡す者。囁くように会話する者。歩き始める者。少しずつ、小波のように囁きながら学校へと移動し始めた。

二人は少し離れて静かに学校へと向かった。

昴はいらいらして考えた。

（殺してやるって、なんだよ！ 誰が言っているんだ、みんな聞えたいだけだ。）

くそ、美咲は離れて歩いてるし、いったい何なんだ！
むしゃくしゃする思いで昴は歩いていた。

…

一時限目の授業が始まる。

先生が呟く。

「二等辺三角形の面積は…」

その時また！

コロシテヤル！ コロシテヤル！

一瞬にして、教室が暗闇に飲み込まれたように静かになる。

（今度は、はつきり聞いた、それも殺意まで伝わってきた）

昴は理解できない感情と、恐怖に襲われた。

一瞬の静寂の後、蜂の巣のような騒ぎになる。

生徒が立ち上がって喚く。

「誰だよ、殺してやるって！」

女生徒が悲鳴をあげる。

「いや」

隣りの生徒に聞く男子。

「お前も聞えたのか？」

立って騒ぎ出す者。震えて机にしがみつく者。大声で問い詰める者。会話し始める者。違つと首を振っている者。

「先生！、これは何？」

先生は、黒板にしがみ付き、大きく見開いた目が空中を彷徨っていた。

コロシテヤル！　コロシテヤル！　コロシテヤル！

強烈な殺意と言葉が頭の中に響いてきた。

コロシテヤル！　コロシテヤル！　コロシテヤル！

殺意も声も止まらない。

昴は立つ事も喋る事も出来ずに、机にしがみ付き、湧き上がる恐怖に己を見失いかけた。

（美咲は？）

美咲の事を思うことで、恐怖を押し込めようとする。

震えながら美咲を見る、美咲もガタガタと震えながら机にしがみ付いていた。

雷のような音とともに机が壁に当たる。誰かがカッターを持ち暴れ始めた。

「殺せるもんなら殺してみろ！　俺はやられん」

落雷の如く、机が倒れ散乱する。

「ギヤ　」

切られた肩から、鮮血が飛び散る。

半狂乱で暴れる生徒を見ながら、昴は美咲の事を思った。

（ここは危ない、美咲を連れてここを出よう）

気が狂いそうな殺意と声の中。美咲の事を考えて、正気を保っていた。美咲は教室の隅で震えている。手足が素直に動いてくれない、震える手足に力を込めて美咲の所に這いずって行く。

「美咲！　美咲！　ここを出るぞ」

美咲は恐々とこちらを見た、恐怖で顔面蒼白だ。

「ここは危ない、出るぞ！」

小さく頷く美咲。

美咲の手を取って廊下に出る。そこから中で騒ぎが起きている。まともな所は無い。

手足の震えも慣れて来た。だが、殺意の声は徐々に強くなって来る。壁をつたって立ち、ゆっくりと歩き始める。

昴は励ますように美咲に言う。

「家に帰ろう」

美咲は震えながらうなづく。

校舎の外に出ると、いたる所で煙が上がっている、事故だ。

絶望的な状況を理解した。

(狂っているのは、学校だけじゃない)

家まで徒歩で40分。事故や人を避けながら美咲の家に着く。

美咲を家に入るように促すが、震えて離れ様としない。

「一緒に入るか？」

うなづく美咲。

玄関に入り、居間へ行く。そこに美咲の母が倒れていた。

「おかあさん！」

美咲が駆け寄る。母の返事が無い。倒れている床と服に血のりがべったりと付いていた。美咲は母を揺すって叫びつづける。

「おかあさん、おかあさん、おかあさん、おかあさん、おかあさん」

蒸せるように泣き始めても、やめない。

「おかあさん、おかあさん、おかあさん、おかあさん、ああ

」

美咲を見ていた昴の頭の中に、殺意と声がかかります強烈に入ってくる。心の総てに押し掛かかって来た。

昴は、今見ていることが現実なのか妄想なのか分からなくなった。

(俺は狂っているのか？ 目の前にあるのは何だ？ 美咲と死体？

どうして？ 何故？)

美咲がひとしきり泣いた後、美咲の部屋へ引きずって行く。

二人で壁に寄りかかって座った。

話し掛けても、虚ろな瞳の美咲からは返事が無い。
心が暗闇に飲み込まれそうな昴が眩く。

「俺、もう駄目かもしれない」

外からは、事故や火事の音、悲鳴や大声が聞える。
昴は最後の力で、美咲を揺らしながら呼ぶ。

「美咲、美咲、美咲！ 美咲！

俺もう、美咲を守れそうに無い、ごめんな」

そして、何も聞えなく、何も見えなくなった。

殺意と声が昴の心を食い尽くしていた。

二人は、その場で折り重なるように倒れた。

そして、動かなくなった。

∴

数日後、総ての人間は死亡した。

∴

何処からとも無く声が響く。

ワレワレニトツテ、不要ナ生物ハイナクナツタ。恐竜ニ続キ、

二回目ダ。

植物集合意識の声だった。

(後書き)

これは本の課題から作ったものです。批評お願いいたします。

殺してやる

殺してやる

PDF小説ネット発足にあたって
PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5086b/>

殺してやる

2009年3月11日13時52分発行